

STAGE+を楽しむ(70)(HP 収載)  
—リヒターのブランデンブルク協奏曲—

1. 始めに

前報(69)に引き続き、STAGE+のリヒターとミュンヘン・バッハ管弦楽団によるブランデンブルク協奏曲全曲の演奏の試聴を実施します。

2. 試聴音源

今回は、リヒターとミュンヘン・バッハ管弦楽団によるブランデンブルク協奏曲全曲の演奏を選びました。

リヒターとミュンヘン・バッハ管弦楽団によるブランデンブルク協奏曲全曲  
バッハの使徒による圧倒的演奏

収録日: 1970年4月1日

2024年1月1日までの期間限定

指揮者、オルガニスト、チェンバロ奏者として活躍したカール・リヒター。彼は世界のバロック音楽シーンで最も重要な人物の一人として、とりわけバッハとヘンデルの演奏で名声を博していました。本映像は、「バッハの使徒」とも評されたリヒターが1970年にミュンヘン・バッハ管弦楽団と共に行ったブランデンブルク協奏曲の全曲演奏の模様です。構築力の高さや格調高い音色に圧倒されるのはもちろん、オットー・ビュヒナー(ヴァイオリン)やパウル・マイゼン(フルート)など名手のソロも華麗に響き渡ります。

演奏:

ミュンヘン・バッハ管弦楽団

指揮:

カール・リヒター

曲目:

ヨハン・セバスティアン・バッハ

ブランデンブルク協奏曲第1番へ長調 BWV 1046

ブランデンブルク協奏曲第2番へ長調 BWV 1047

ブランデンブルク協奏曲第3番ト長調 BWV 1048

ブランデンブルク協奏曲第4番ト長調 BWV 104

ブランデンブルク協奏曲第5番ニ長調 BWV 1050

ブランデンブルク協奏曲第6番変ロ長調 BWV 1051



### 3. 試聴の経過

バッハの演奏では、言わずと知れた定評のあるカール・リヒター指揮によるミュンヘン・バッハ管弦楽団の演奏で、前報(69)のアーノンクール指揮ウィーン・コンツェントゥス・ムジクスの演奏との比較に興味があります。

編成はウィーン・コンツェントゥス・ムジクスより大きく、宮殿の礼拝堂や客間のような会場での無観客の演奏です。使用楽器は一部リコーダーもありますが、大半は現代楽器のようです。

アーノンクールができるだけオリジナルの編成と楽器の使用に拘り、リヒターは現代のバッハの演奏を目指したように見受けられます。また、ピッチはリヒターの方が高めに聴こえます。

リヒターは端正な指揮ですが、鍵盤奏者としても知られているリヒターが一部、チェンバロの通奏低音を受け持ちながら、弾き振りもしています。

音質は、アーノンクール指揮ウィーン・コンツェントゥス・ムジクスより、若干緻密さで後退しています。





#### 4. まとめ

以上の STAGE+配信は、追加の LAN iSilencer の効果も加わって、前報(69)のアーノンクール指揮ウィーン・コンツェントゥス・ムジクスの演奏との演奏の違いがよくわかりました。

以上